

## 「神の愛が心に注がれている」

2018年09月12日

ローマの信徒への手紙 5章1節～5節 このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

パウロは、割礼の有無、律法の民であるか否かに関わりなく、アブラハムの信仰に倣う者は全て、アブラハムの子として神から義とされると力説した。義とされるとは不義が帳消しにされることだから、義なる神と親しく交わり、神との平和を得ることである。「わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており」と言っている。更に、「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」と言う。義とされた者は神と親しく交わる平和を得ているが、それは同時に、神の臨在に与る希望を誇ることである。パウロにとって、義とされることは神と共にあり、神の恵みの中で生きる希望を誇ることであった。

ところが、一転して「そればかりでなく、苦難をも誇りとします」と言う。義とされた者は、希望だけではなく、苦難をも誇りにする。ここに、パウロの救済観がある。神に義とされることが救われるということであるが、その救いは人間の願望が適えられ、苦しみや悲しみのない、絵に描いたような救いではない。神の栄光にあずかった主イエスの十字架の苦難と同様、義とされた者も地上にある限り、苦難がある。しかし、救われた者は、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」知っている。苦難の中で忍耐することを学ぶ。忍耐は鍛錬されて練達へと高める。そして、練達は確かな希望を生み出す。だから、苦難をも誇ると言うのである。パウロの語る救いは、この世の苦難を真正面から受け止め、これを希望へと転化することであった。そして、「希望はわたしたちを欺くことはありません」と希望は確かであると言っている。フィリピ書3章10節、11節で「わたしは、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と、キリストが負った十字架の苦難に与り、復活の命に達する希望を生きていると語っている。更に次の、12節～14節で「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることで」と、希望に生きる生き方はキリスト・イエスに捕らえられているからであると書いている。ローマ書では、希望に生きる根拠は「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」と書いている。困難があろうとも、これを希望に転化する神の愛が聖霊によって、心に注がれている。だから、困難をも誇りにすると言うのである。